

八流之幡降、我日本皇十六代譽田天皇廣幡八幡麻呂也、云々、蓋幸國城有八流之幡降瑞、因以稱正八幡宮、云々爾則似以大隅國府八幡爲正本者、而稱八幡所處有異、或有出于後世、俗規今如鹿兒島神社、天朝祀典所秩、而巫僧多不知其祀彥火々出見尊者、乏好古之士耳、○運胤云、當社を正八幡宮と稱して、舊號を失へる如きは、已に中右記に見えたるが如し、薩摩國外新田宮、對馬島和多都美神社等の如きみな同じ、そはかの欽明天皇の時代よりの事にもぞあらん、あなかしこ、是に依て思ひ察るに、諸國の神社にも舊號を擱て云々、と稱し奉るも、強に後世のしわざのみにはあらざるべし、

雜事

中右記、寛治六年二月十五日、有陣定、是去年十二月、大隅國正八幡宮寶殿燒亡之故也、

噺吹郡三座 並小

噺吹は假字也、和名鈔、郡名噺吹、會式廿二、民部拾芥抄、國郡贈於、○日本紀、下代高皇產靈尊以眞床追衾覆於皇孫天津彦々火瓊々杵尊、而天降於日向襲之高千穗峯矣、景行天皇十二年十一月、到日向國、起行宮、以居之、是謂高屋宮、十二月癸巳朔丁酉、議討熊襲、續日本紀、延曆七年七月己酉、太宰府言、去三月四日戌時、當大隅國贈於郡曾乃峯上、火炎大熾、響如雷動、及亥時、火光稍止唯見黑烟、然後雨沙、峯下五六里、沙石委積可二尺、其色黑焉、

大穴持神社

大穴持は於保奈牟知と訓べし○祭神明か也○國分郷小村に在す神社考

類社

大和國葛上郡大穴持神社の條見合すべし

官社 官幣

續日本紀、寶龜九年十二月甲申、去神護中、大隅國海中有神造島、其名曰大穴持神、至是爲官社、類聚國史、弘仁五年二月乙酉、大隅國曾於郡造島神預幣帛例、

雜事

續日本紀、天平寶字八年十二月、是月西方有聲、似雷非雷、時當大隅薩摩兩國之堺、烟雲晦冥、奔電去來、七日之後乃天晴、於鹿兒島信爾村之海、砂石自聚、化成三島、炎氣露見、有如冶鑄之爲形勢、相連望似四阿之屋、爲島被埋者、民家六十二區、口八十餘人、天平神護二年六月己丑、大隅國神造新島、震動不息、以故民多流亡、仍加賑恤、

宮浦神社

宮浦は美夜宇良と訓べし○祭神天神七代、地神五代、社○福山郷宮浦村に在す神社考

神位

或記云、寶曆十二年十二月十八日、被奉授正一位々記、

韓國宇豆峯神社

韓國は加良久爾、宇豆峯は鳥頭美禰と訓べし○祭神五十猛神、韓神、會富理神、山陵考○或說、今天

當社は舊古
國府郷神造
島に在りし
が後に今の
小村の地に
遷りしに
印本官の字
を脱す今古
木に據て補